

考古学と植物学

奈良教育大学 北川 尚史

最近、私は佐々木高明氏(奈良女子大学)の近著「稲作以前」を興味深く読んだ。氏は稲作以前、すなわち縄文時代に、「照葉樹林焼畑農耕文化」と定義される、弥生時代以後の稲作文化の下地となった農耕文化が存在したに違いないという大胆な自説を力強い説得力をもって展開している。縄文期は狩猟・採集経済の時代で農耕は存在しなかったとする今日の考古学の常識に挑戦する劃期的な著作であり、日本民族の農耕文化の起源というロマンティックな課題に新たな光を投げかけている。日本や東南アジアの各地で自らフィールド・ワークを重ねて得た焼畑に関する豊富なデータを吟味し、また山間僻地に残る祭礼や信仰などに関する様々な習俗の起源について考察する。そして、一見無関係に見える農耕や民俗に係る雑多な知識は、氏の鋭い洞察によって、あたかも無雑作にばらまかれた金属片が電流によって磁極に向うように、相互に有機的な関連を帯びて、縄文期の農耕の存在という一点に向って見事に指向する。

しかるに、その論理の展開にはほとんど間然するところのないこの主張の泣きどころは、著者も述べているように、考古学上の知識からはわずかな情況証拠しか得られず、直接的な証拠が欠けていることである。すなわち、縄文時代の遺跡から確かな栽培植物が発掘されたことがないのである。これは私達が植物の系統を論じる時しばしば経験することであり、比較形態学や発生学などの間接的な様々な手段を用いて結論を出す^が、それを裏づける古生物学上の証拠—化石—が得られることはきわめて稀であり、その系統論は、常にスペキュレーションの域にとどまるに似ている。

しかし、古生物学が対象とする地質年代と異なつたかだか数千年前の出来事であり、事実トチ、クリ、カシなど野生植物の種子や堅果が縄文時代の遺跡から出土していることから判断しても、もし農耕の存在が真実ならば、その作物が発見される可能性は十分にあると思われる。著者も“いずれ近いうちに「稲作以前」の農耕文化の姿を遺物の面から明瞭に復原する日がくるものと思われる”という強気の発言をしている。私自身も、考古学に多少の関心を寄せている者として、著者の着実に積みあげた推論が、栽培植物の遺物によって明白に証明されることを念願している。そして、考古学の資料の重みがいまさらのように認識され、例えば、シコクビエのぎっしりつまった縄文式土器の発掘——それは私達にはファラオの財宝のつまったエジプトの出土品に

まさる価値があるように思われる——にスリリングな期待を寄せているのである。

ところで、古い遺跡から発掘される不完全な植物資料の種(しゅ)の同定(identification)という困難で手間のかゝる仕事は、よく訓練された専門家にのみ可能である。本誌3号で嶋倉巳三郎氏が従来の専門家(?)による古代木材の種の同定にしばしば誤りがあることを指摘しているが、植物資料に係る問題の最も基礎的な作業——種の同定——があいまいではせつかくの議論も砂上の楼閣となる。例えば、ヒエカイヌビエかという問題は、前者が栽培種で後者が野生種であるゆえ、農耕の存否を証明する鍵になり、考古学的にはきわめて深刻な意味をもっている。

不完全な資料の種の同定には、解剖学的な形態の特徴が最も信頼できる拠りどころとなるが、日本の植物学ではこの分野の研究ははなはだ少ない。欧米では、Hayward, H. E. 「The structure of economic plants」(1938—最近リプリント版がでた)にみられるように、コムギ、トウモロコシ、ジャガイモなど主要作物の内部形態が非常に詳細に研究されているが、日本ではイネやサトイモのような普通作物ですら、コムギやジャガイモに匹敵する詳細な形態学に関するモノグラフをもっていない。わが国では、植物の解剖構造の記載が進んでいる分野は植物学プロパーではなく、林学と薬学であるが、前者は樹木の材の部分だけであるし、後者は生薬成分を含んでいる局所に限られて、種子や果実を含む植物全体の内部形態を克明に記載した例はない。日本の植物学は、考古学が要求するであろう難問に十分に対応できる体制を整えていない現状でなる。

植物学が考古学に重大な役割を果している好例の一つは、最近私が入手した Greiss, E. A. M. 「Anatomical identification of some ancient Egyptian plant materials」(1958)である。これは、古代エジプトの遺跡から出土する植物資料の解剖学的研究であり、全体が2部に分れている。第1部は17種の植物の栄養器官(根、茎、葉)の解剖構造を徹底的に詳しく、多数のプレートを附して記載したものである。その中には、ダンチク、ヨシ、ハマスゲのように日本にも自生している植物も含まれており私達にとってもたいへん参考になる。第2部は、第1部の知識を応用して、エジプトの新石器時代や第一王朝時代の発掘品や、カイロヤストックホルムの博物館に所蔵されている古代エジプトの植物資料の種の同定を行ったものである。扱われている植物は草本性の単子葉植物が多く、エジプトのフロラの特徴を反映している。また、古代エジプトの遺跡から出土する植物の大部分は、今日もおナイル・デルタに自生する普通種であり、古代エジプト人が身近かな植物を様々な用途に使用したことが立証されている。

カミガヤツリ(いわゆるパピルス)は単に紙の原料としてだけではなく、その地下茎は食用や薬用に、その稈は編んでロープ、籠、草履やボートの材料にまで利用されている。また、ダンチクがミイラの覆いに、ヨシが敷物に使われており、現在私達の身近かにある植物がはるかなエジ

プトの古代遺跡から出土している事実そのものも興味深いが、この著作から学ぶべきはその着実な方法論である。近縁な種の間形態的な違いを細胞レベルの構造まで詳しく観察して、十分な植物学上の知識で武装して考古学資料にたち向うその学問的な姿勢はこのジャンルの研究の模範となるべきものであろう。

古代エジプトの植物資料に関する研究は前世紀の初頭以来数多くあり、いわゆるエジプト学の理科学面の一端を植物学が着実に担っているが、わが国では考古学と植物学との関係は今日もなお十分緊密であるとは思われない。もっとも、日本のように湿潤で気候の変化の激しい風土ではエジプトのように草本植物の栄養器官が長い歳月にたえて遺物として出土する可能性はほとんどなく、植物学の考古学に果たす役割はかなり限定されるであろう。しかし、種子や花粉や材などはこれまでにしばしば古い遺跡から発掘されているのであり、それらは植物学者の正確な研究によって考古学の資料としての価値を発揮するものと思われる。そして、私は佐々木高明氏によって重大な関心と呼びおこされた「稲作以前」の農耕の存在を証明するために、わが植物学が一役かってほしいものとひそかに念願している。